

# 見せかけの学力と「ごまかし勉強」

藤沢 伸介

## 1 はじめに

「今日は昨日より暑いか寒いか」といったことは、皆の判断が一致することもあれば、一致しないこともある。こんなことは大した問題ではないので、延々と議論が続くなどということはないが、皆が今日は寒いといっている時に、「いや暑いのだ」といって譲らない人が時々いる。そんな人でも、温度計を示して「昨日の同一場所同一時刻の温度に比べて3度低い」といわれると引き下がらざるを得ない。通常は、温度の測定が暑いか寒いかの唯一の検査方法だからである。

誰かの学力がどの程度であるかということは、多くの学校関係者、子供やその家族、企業の人事関係者などの関心事であり、単なる個人的印象だけで判断するわけにはいかない。通常はテストと呼ばれる学力検査を行って、慎重に判断することになっている。温度計によって部屋の温

度を知ると同じように、テストによって学力を検査しているのである。

ところで、果たしてその温度計は部屋の温度を正確に測定しているか、という点必ずしもそうではないことを我々は知っている。たとえ精度に優れ、器具検査に合格した温度計であったとしても、何らかの人為的な方法（例えば暖かい息を吹きかけるなど）によって、温度を高く表示することはできるからである。学校を休みたい子供が、体温計を湯につけて熱があるように見せかけることがあるという事例は、測定の脆弱さが誰にでも知られていることを物語っている。

学力検査も、その脆弱さは広く知られており、カンニングのような姑息なごまかしに対しては、道義心に訴えたり監視することによって未然に防ごうとしたり、発生した場合には罰を与えたりして、より正確に測定しようとする努力が払われている。しかしながら、もう少し大掛かりで巧妙な

ごまかしが、学習者たちによって公然と行われているのもかわらず、ごまかしという認識が余りないため罪悪感もなく、放置されているばかりか、しばしば奨励すらされている事実があるので、このことをまず明らかにしたい。

## 2 ごまかしの横行

大学の語学授業のテストで、大半の授業は欠席し自分自身の学習も殆ど行わなかった学生が、テストの直前に友人のノートをコピーしてそこにかかれた翻訳を暗記し、テキストの部分引用の和訳問題のみ出題されたテストで合格点を取るようなことは、日常頻繁に行われている。言語が殆ど習得されていないのに成績だけ良いということは、確かに試験場でこそカンニングはしなかったかもしれないが、成績がその学生の学力を反映していないという点では、この学習は明らかにごまかしである。このごまかしについても、出題で手抜きをしたがる大学の語学教員と単位取得のみが目的で大学に来る学生の利害が一致するためになかなか減少せず、こういう語学教育に見切りをつけた学生が語学学校に望みを託す現象まで出始めるほど、大学の語学授業でのごまかしは横行している。

授業中に教師に向かって「それノートに書くんですか。」と質問する学生がいると嘆いていた大学の教員がいる。大

学生にもなって、自分がノートに記録するかどうかを教師に尋ねるといふのもおかしい話だが、その学生の本音は、テストの準備のために記録しておく価値があるかどうかを、教師に尋ねているのである。テストに出ることは重要で学習する価値があり、出ないことは無駄だという考え（これはテストをごまかし勉強で準備することが前提になっている発想だ）がしみついた状態で、大学迄来ていることになる。

その他、大学の通年科目で前期試験の成績が悪いと、履修を放棄してしまう学生が多い。単位が取れないような科目は学習の無駄と考えているのだ。これらの事例は、学習の目的がそれによって自己を成長させることでなく、テストで好成绩を取ることになってしまっていることを示している。

いつごろからどのようにして、このテスト目的のごまかしの姿勢が身についてしまうのだろうか。ごまかしの行動は、中学生でもう観察できる。

中学や高校の校内定期テストの英語の問題では、しばしば教科書本文をそのまま引用した空所補充問題が出される。これは必要な熟語を習得したかどうかを調べるためによくとられる形式である。また、単語の配列力をみることによって文の構成員があるかを知るために、整序作文問題が教科書中の文から出題される。しかし、このような教科書その

ままの文を使った問題に対しては、熟語を習得しなくても文構造を納得していなくとも、教科書の試験に出そうな部分さえ暗記しておけば、点数が取れてしまうのである。この時に、単語、熟語、文型を学習せずに教科書の暗記のみで点数をとろうとするのは、温度計を一時的に暖めるのと同じで、ごまかしといえるであろう。残念ながら、通常のごまかしは教師によって発見されることはない。内容の習得が充分なための高得点か、ごまかしによる高得点かの違いが、答案には現れないからである。

### 3 「ごまかし」の定義

議論の正確な伝達のために、この辺りで「ごまかし」という語をきちんと定義しておく必要があるだろう。すなわち、「目標が達成されたかどうかについて、すべてが点検され得ないという限界をいいことに、点検箇所のみ基準を合格するように処理し、点検者が点検できない、又はしない箇所については、目標達成行動をとらないか、又はいい加減に行うこと。」を「ごまかし」と呼ぶことにする。

このように規定すると、次の各例文のように、日常我々が「ごまかし」という語を使う文脈にも齟齬は起こらない。

①その工務店は、検査だけ合格させ、手抜き工事で費用をごまかした。

②会計担当者は、監査まで時期があったので、帳簿をご

まかした。

③その店は、安物をいかにも良い品のようにごまかして売った。

いずれにせよ、ごまかしは我々の文化では、好ましくない行為として認知されていることに異論はないであろう。そして、その文化で好ましくないと認知されている行動は、教育の場面では奨励されるよりは抑制されるのが通常である。

しかしながら、学習に関しては教師の意図に反してごまかしの態度をとろうとする生徒が最近多くなってきた。これは筆者のフィールドワークにおける聞き取り予備調査での実感である。面接をしてみると中学生の場合「ごまかし」は親から奨励されているケースが多い。そして困ったことには、それこそが正しい学習法だと思いこんでいて、「ごまかし」であるという認識すらないのが大半である。ごまかしの結果として通知表の成績が良い場合には、本人はその科目が得意だと錯覚してしまうからだ。ところが、受験準備の必要性から、出題範囲の広い模擬試験や標準学力テストで応用問題にめぐり合うころには、学習したことが忘れられており悪い成績を取ることも多い。そうなる与自己認識が混乱したり、自信を喪失するケースもある。こういう場合は、認知カウンセリングで立ち直らせるのもかなり大変である。

すべての科目に関して一〇〇%ごまかしを禁じなければならぬというわけではないが、少なくとも本人がこれは好きな科目だから全力投球で身につけようと思っている科目については、その場しのぎでしかない「ごまかし」は、中学生段階からさせたくはない。そして大学生と異なって学習者本人がごまかしであることを自覚していないだけ、中学生の「ごまかし」の事態は深刻であるとも言えよう。

表一は、中学生の主要五教科の学習法の一覧である。いずれも、正統派の学習法とごまかしの勉強法が対比されている。正統派の学習法は、指導要領に記述されている各教科の設置目的（すなわち学習目標）にも合致し、実行する過程で判断力や洞察力が養成されていく方法になっているのに比べ、ごまかしの方法はテストの点数こそ一時的に良くなるかもしれないが、もしそれだけしかやらないのであれば、学習目標は達成されず、しかも却って学習の興味を失ってしまうような危険な方法でもある。

#### 4 ごまかしへの働きかけ

##### (1) 学力検査の方法

「学習」という行為を客観的に認知し、自分の学習法の適切性を考えるようになるのは、中学生になった時という子供が最も多い。上級学校に進学する、算数が数学に取って代わる、外国語の学習が始まる、学級担任制から教科担

任制へと変化する、といった大きな変化が訪れるからである。

その時、学習法の適切性の判断に、子供にとって最も大きな影響を及ぼす因子は、テストにどんな問題が出るかということである。試行錯誤によって学習法を模索している時には、テスト結果が悪ければ方法が不適切、良ければ方法が適切と判断できるからである。従って、この時期に教科書を機械的に暗記しさえすれば理解不十分であっても得点が可能なような問題に接していると、機械的な暗記を強化してしまうことになる。

しかしながら、筆者の調査によれば、中学一年の定期試験問題の殆どが、教科書文を引用した簡単な暗記確認問題か技術習得の確認問題になっている。「新しい学力観」が強調されるようになって、やっと思考力を試すような問題が少しづつ登場するようになってはきたが、まだ残念ながら少数派である。

なぜ、学んだ結果の知識や技術を検査する問題ばかり出すかを出題者に尋ねると、難しい問題に遭遇することで自信を無くさせたくないというような回答が返ってくるが、成績が相対評価方式で評定される以上、問題の難易度は評定値に影響しないから、これは本当の理由とは判断しがたい。結果の知識や技術を検査する問題の方がはるかに作りやすいし、採点が楽だからという所が本音ではなかるうか。

又、生徒に学習習慣が身についていない場合、高度な問題ばかり出すと平均点が非常に低くなり差がつけられなくなるので、仕方なく教科書そのままを引用した簡単な暗記問題を入れて、平均を高くせざるを得ないという事情もあるようである。しかしこの迎合的対応は、生徒の不十分な試験準備を強化するので、後で再度話題にするが、悪循環の原因となることは明らかである。

いずれにせよ、簡単な暗記確認問題は、その科目が本来目指していた学力、即ちその教科で修得させたい発想法が身についたかどうかを殆ど検査していないことが多いので、ごまかしで得点が可能になってしまおうのである。

教師の中には、あらかじめ試験問題を教える者までいる。生徒がなかなか学習をしようとならない場合、試験問題を教えると、少なくともそこだけは生徒が学習するからというしかし、これでは教師が生徒にごまかしを奨励していることになる。これはそんなに珍しいことではなく、試験問題を教えていることを吹聴する教員までおり、罪の意識も無いのは言語道断だ。こうやって出された成績評定もごまかし、即ち見かけ上の学力であるのは明らかである。

実力が充分に無い生徒に良い成績を収められてしまうという事は、教師が騙されているのと同じだ。普通は自分が騙されることを望む人はいないから、ごまかしで得点可能な問題の出し方をする教師は、この因果関係の認識不足

であると思われる。

## (2) 親の指導、暗記用商品

既に述べたように、生徒がテストで好成绩の場合、どうやってその好成绩を収めたかまで教師は見極められないのが普通である。沢山の生徒を相手にせざるを得ない現状では成績さえ良ければ問題なしとし、成績の悪い生徒の方にエネルギーを向けざるを得ないのかもしれない。しかしながら、この良い成績は実は親の作り出したごまかしというケースがかなり多い。

子供の成績が親の期待通りでない場合、親が出題率の高そうな所を判定して暗記材料を作ってしまう、それを強引に子供に暗記させるケースがかなりあるのだ。これは親が子供から試行錯誤の機会を奪っているという好ましくない行為であるが、これを見つけ出してやめさせる教師など皆無に近く、中には「少しはお母さんが見てあげて下さい」等とアドバイスする教師までいる。

親が暗記材料を作っている余裕がない場合、現在は各種暗記材料が商品化されている。例えば一問一答式問題集という商品があり、本来は受験直前確認用だが、これなら自分で暗記材料を作らなくても出版社の人が作ってくれているので、それを利用してテストを受ければ楽である。教科書準拠の単語暗記カードも売られているし、教科書中の重要語句をマークし、上から遮蔽板で隠せば教科書が空所補

充問題集に早変わりするようなメーカーも売られている。

自分で試験範囲の要点集を作ったり、暗記材料を作ったりすることは重要な学習である。この作業の過程でその分野の体系が理解されてくるからである。冷凍食品の解凍ばかりしては料理の腕が上がるらないのと同じ原理で、他人の作った材料で学習したつもりになっていたら、見かけ上好成績が取れたとしても学習法は修得されていないのだ。

我々は自分の人生で必要なことをすべて学校で習うわけではなく、学校では特定の科目によって学習法をまず修得しておく、後は必要になってから自分で学習するということになっている。従って、後で自力で学習できるようにしておくためにも、学校での各教科の学習はすべて手作りでやらねばならないのである。初めのうちは不器用でうまく行かないかもしれないが、親がそこで手を貸してしまったり、重要な学習の機会が奪われることになると同時に、子供にはごまかしを奨励したことになってしまうのである。

### (3) トレーニング教材

学校の予習や復習、定期試験準備等を完璧に含んだ教科書準拠のトレーニング教材を発行する会社と契約を結び、定期的に教材が届けられ、子供はただその教材を埋めていくだけで自動的にすべての知識と技術の習得ができるようになってきているシステムが、かなり多くの家庭で利用されて

いる。柔軟な発想力を育てるのには役立たないが、学校のテストが結果の知識や技術を教科書そのままを引用して確認するタイプの問題である限り、このシステムを利用していけば、出題範囲が狭いために暗記量も少ないので良い成績が取れるようになっていく。ごまかしのためのほぼ完璧なシステムといえる。

本来、何かを期日迄に仕上げようとしたら、まず必要なことを列挙し、次に段取りをつけて実行していく必要がある。学校で行われる定期考査の意義の一つは、この計画性を養うということにある。しかしながら、このトレーニング教材を採用した場合には、すべてお膳立がしてあるために計画性を養うことができない。学習法の試行錯誤の機会を奪うことに加えて、計画性の涵養の機会をも奪うという二重の犠牲を払いながら、好成绩だけとれているわけで、多くの家庭が採用しているだけに、その影響力は無視できない。

### (4) 考査対策塾や家庭教師

学習塾の中には、本来の学力を増進させたり認知カウンセリングを行ったりして、子供の知的成長に貢献している所がある一方で、定期試験のごまかしの準備を行う考査対策塾がある。親の強制学習を肩代わりするわけである。入学試験準備となると範囲が広過ぎるので、ごまかしはそう簡単にはできないが、定期試験は範囲が狭いので、無理や

り知識を注入することは難しいことではない。又家庭教師の大半は大学生であり、教育理念に基づいて指導する者よりはお金のために成績を上げようとする者の方が明らかに多い。柔軟な思考力を養おうとする家庭教師がいたとしても、親は成績上昇のために授業料を払っていることを主張して、知識注入型指導を要求することになると、家庭教師も従わざるを得なくなるであろう。そうなるごまかしを教えることになるのは当然であろう。

#### (5) 教科書準拠ワークブック

情報検索能力を養うという意味での辞書や資料の活用能力の育成や、情報整理能力を養うという意味でのノート指導も各教科の重要目標の一つである。しかし、授業中に使用されるワークブックの中には、それらを出版社側が使ってやっつけてしまい、教師や生徒の手間を省くためとしか言えないようなものが、少なからず存在する。辞書類を検索してそれをノートにまとめることを生徒がしなくても、生徒の手に検査結果の表がそろようなワークブックがその例だが、生徒の手抜きの助長という点ではこれもごまかしである。

#### (6) 攻略本

学習の方法を指南する本が数種類出版されているが、そういう本の中には、積極的にごまかしの勉強法を薦めているものもかなりある。

こういう本は、大した努力なしに楽に好成绩が取れるような印象を与える過激なタイトルがついていることが多く、成績に対する不安につけこんで儲けようという姿勢が現れている。大学受験直前の受験生が、最後の追い込みに利用するならともかく、まだ批判能力の充分に育っていない中学生の時期に、こういうものを子供に与えるのはいかなものか。著者や出版社の姿勢を疑わずにはいられない。

以上、中学生がごまかし勉強をするようになるきっかけを六つに分けて述べた。ごまかし勉強は、無味乾燥な作業が多く当人にとっても楽しいものではない。しかし、ごまかしによって学習意欲が低下すると、それでも結果だけは維持しようとして、楽しくはなくても更にごまかしを繰り返すという悪循環を発生させる。そのうちにごまかしの態度が身についてしまうのではないか。こうやってごまかしの習性が身についた者が親になれば、今度はごまかし勉強を自分の子供にさせる可能性もあるだろう。

### 5 ごまかしと学習目標

学習者がごまかしをごまかしとして認識せず、それこそがその科目の学習なのだと思ひこんで、大した挫折もなく時が過ぎ、大学生になってもごまかしの態度が改められることがない場合、一番恐ろしいのは、そういう人達の中から教師になる者が出てくることである。今度はその教師が

積極的に自分の生徒達にごまかしを薦めることになるであろう。これは大変困ったことである。このことを数学を例にとって話を進めていきたい。

暗記によるごまかしのきく科目は、ごまかしの意味が理解しやすいが、いわゆる暗記科目でない数学には、ごまかしなど無いと思われる方もあるかもしれない。しかし、数学でもごまかし勉強は色々なレベルで存在するのである。

まず、意味が分からないけれどもかくそういふものだとあきらめて、演算処理法を暗記して問題だけ解こうとするレベルから、ごまかしは始まる。例えば、負の数と負の数を掛けると、なぜ正の数になるのかは分からないが、とりあえず分かるうとすることは諦めて、計算だけしてしまいうレベルである。理由は分からないが、分数の割り算は分母分子を入れ替えて掛ければ良いと暗記して、計算をする態度である。この理屈が分からない者が教師になれば当然生徒に説明ができないから、生徒には強引に演算処理をさせることになってしまう。理屈は分からないが、そのように処理さえしておけば点数はとれるという態度をここで学習者が身につけてしまうと、この考えは拡張されて、文章題でもパターン毎の問題の解法を暗記して、テストを乗り切ろうとするようになってくる。このやり方ですまく行く人は少ないから、数学嫌いが多いのである。最初形から入っても、途中で意味を考えられれば軌道修正がされるが、

そうはならないで、成績が良ければ問題なし、悪ければ苦手と決めこんで、取り組み姿勢までは吟味されないことの方が多い。

現在日本では、中学校段階で数学の時間に一次関数及び二次関数を学習することによって、関数的発想法を身につけることになっている。我々の生活は、設定した問題を次々に解決するというパターンの連続である。この時、原因のパターンと結果のパターンを結び関係を発見すること、言い換えれば何らかの法則が直観的に発見できれば、問題解決の糸口が見えてくる。この関係性の直観と吟味という思考回路を強化するために、関数的発想法が必要なので、最も見やすい形で検討できる数式の形で「関数」を中学時代に学習しているわけである。科学技術の道に進む者も出てくるので、専門領域で扱うさまざまな複雑な関数の基礎を習得しておく必要性から、演算処理に精通できるように中学校の教科書が組み立てられているのは確かであるが、科学技術の道に進まない人達にとっても、関数の学習は前述のように必要不可欠である。(注、筆者は、科学技術の道に進まない者にとっても演算処理精通の必要性があると考えているが、本稿の主旨からそれることになるので、その論証はここでは行わない。)

にもかかわらず、身の回りを見渡してみれば、関数学習の意義がわかっていない人が殆どである。信じられなければ



ば中学時代の関数の学習が役に立っているか誰でも尋ねてみるとよい。実に多くの人が「難しかった記憶はあるが、どう役に立っているかわからない」と答えるであろう。数学が苦手な人だけでなく、得意だといっている人も、実は演算処理が得意なだけで、意味は分からないという事例が多い。これは、年号だけは沢山暗記しているが、歴史的発想が育たない等という社会科教育の問題点と根は同じである。ここで数学を例に出したのは、数学は日常生活とは無縁で早期に挫折しやすい科目だと、多くの人から認知されてしまっている科目だからである。

このように述べてくると「教科書では関数の意義について多くのページがさかれていない」という反論が出てきそうである。こんなことはあたり前のことで、教科書の記述は所詮教育の素材であって、実際には教師が授業でそれを料理して提示するべきことだからである。特に日本の教科書は、必要最低限度の要点のみ記述するという方針によって編集されているから、意義については、教師が授業で補うしかない。

何かがあると、すぐに文部省を非難するお国がらではあるが、関数については、文部省発行の「中学校学習指導書 数学編」(学習指導要領の解説書)にきちんと次のような記述がある。少し長くなるがここに引用する。

「中学校における関数指導の意義については、次のア、

イの二つの面が考えられる。

ア 自然現象や社会現象を考察したり理解したりするた  
めには、関数的な見方や考え方を必要とする場面が多  
いので、そのための素養として、関数についての学習  
が必要である。

イ いろいろな関数についての理解及びそれらの学習を  
通して養われる関数的な見方や考え方は、これから先  
の数学のいろいろな分野の学習において重要な役割を  
果たす基礎的なものである。

中学校における関数指導では、実際には、上のイの面が  
強く表面に出るが、その場合においても、何のための関数  
指導かという観点から、アの考えを念頭において指導に当  
たることが大切である。」

つまり学習者の立場から言い換えれば、「単なる演算処  
理だけを学習するのではなく、日常の様々な場面で、関数的  
な考え方が身についているとどんなにすばらしいかをきち  
んと理解しなさい」といっているわけで、この立場から教  
科書が作られ、授業も進められるように期待されているの  
であるから、それは指導要領の不備が原因ではないのであ  
る。

関数に対する学習者の態度を、座標上で考えたのが図1  
である。数学教育の目的は、すべての生徒を数学者にする  
事ではないから、生徒全員をAの状態にすることができな

くても仕方がないが、少くともBの状態には持っていかなければならぬわけで、C（ごまかし）又はDの人が多い現状は、教育エネルギーの消耗を意味する。A又はBの態度の学習者が多くなるように、教育界の風潮を改めていく必要がある。

柔軟な発想力を高く評価する、日本ジュニア数学コンクール（企画：四方義啓（名古屋大学））において、実力を発揮する子供達が必要しも学校において数学の成績が優秀とは限らないと指摘されているが、これは実に皮肉である。小学校で日常生活に最低限必要な演算技術を習得させた後、

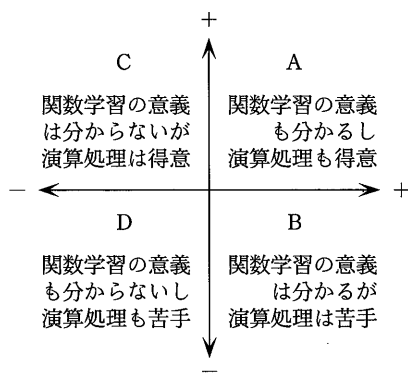


図1 関数に対する学習者の態度

中学以降に数学が設置されているのは、本来数学という抽象度の高い分野を学習することで、柔軟な発想力をつけるためだった筈である。それがどう間違ったか、必ずしも柔軟な発想が評価されない科目になってしまっている現状がある。

関数の意味がよくわからないことはそのままにしておいて、演算処理さえできれば点が取れるようなテスト問題にも問題があるかもしれないが、それにもまして、テストに出ることだけに習熟して検査項目のみクリアしようとするごまかしの態度が、親や教材会社によって子供に教育されている点を見逃ごすことはできない。例えば、教師が学校で図1のBのような態度を養成するために授業時間を多く使おうものなら、すぐに親から苦情が来て、Cを育てる時間を多くとるよう要請されるという事実があるからである。従って、柔軟な発想力を持つ子供が評価されないからといって、その担当教師のみを非難する事はできないのである。

## 6 「ごまかし」の意味

前項で数学におけるごまかしの様子を述べたが、これは何も数学に限ったことではない。他のどの科目も、多くの生徒達が、テストで点検される部分のみを勉強するという「ごまかし」こそが正しい学習法と信じて実行している。この生徒達の中から「ごまかし」を信じたままで次世代の

教師が誕生していくことを食い止めるためには、どうしたら良いだろうか。このこと検討するためにさらに「ごまかし」の意味を探ってみたい。

まず、「ごまかし」現象はどう理解したら良いだろうか。通常は、この種の教育現象は日本の受験制度と短絡的に結びつけられ、両者の関係を充分に吟味せずに、受験制度の議論に進められることが多いが、筆者は、「ごまかし」を受験制度に伴う不可避な現象とは考えていない。なぜなら子供達の数が減って入学試験が熾烈でなくなってくるのと並行して、ごまかしの態度が多くなってきているからである。受験制度が原因であるならば、熾烈であればある程ごまかしが多くなければならない筈である。これは、何でも受験制度に結びつけようとすると、その結果重要なことが検討されないまま見逃がされてしまう一つの例かもしれない。

筆者の考えは、むしろ、最近のマニユアル中心文化における点検依存傾向がこの風潮をおおっているのではないかというものである。「ごまかし勉強」では、学習者の意識が、科目の目指す学力よりも、テストで良い点が取れるほうに向いている。子供達にとって学習が単なる作業としてとらえられていると、一つ一つやるべきことを処理しては点検を受け、点検に合格することが最も価値のあることになってくる。この過程では、点検され得ない行動は価値が

ないことになるから、その科目の目指す学力をつけたという発想が出てこないのではないか。そして、子供の将来を願う筈の親も教師も点検依存型の発想しかなければ、「ごまかし」は問題にもならないことになるであろう。

筆者は、日本教育心理学会開催のあるシンポジウムに参加した時、文部省の提示する「新しい学力観」を推進する側の研究者と、それを現場で実行する側の若手の教員の議論が全く噛み合っていないのを目の当たりにした。単なる機械的暗記に頼った詰め込みから子供達を解放し、これからの社会を生き抜いて行ける自己教育力を育てようとする学力観と、客観的に点検評価し得ないものを現場に持ち込まれてもそこ迄教師にはやりきれないと反発するマニユアルの考え方の間には、決定的な溝があった。

図1に做って学習に対する態度を表わす座標系を作ったのが図2である。学習者の初期状態はDである。Dの象限にいる生徒を、Aの象限に移動させられれば、その教育は成功したことになるであろう。その時にBを経由してAにたどり着かせようとするのが正統派の学習法であり、Cを経由してたどり着かせようというのがごまかし勉強ということになるかもしれない。

教育が成功してAの状態に生徒を持って行ける確率はそれほど高くないから、もしその教育が途中で挫折するとすれば、CよりBの状態の方が、複雑な社会に適応しやすい

であろうことを考えれば、「ごまかし」をすべきでないことは明らかであろう。しかも、「ごまかし」の蓄積量に限度がある以上、Cの状態からAの状態に移行することがどこまで可能かは、甚だ疑問である。

## 7 ごまかしに対する処方箋

最後に、ごまかしの一般化現象への対策を考えていきたい。

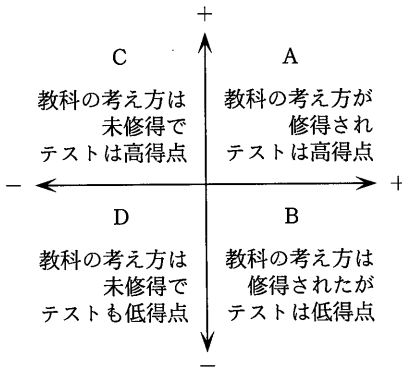


図2 学習対にする態度

(1) 教師が定期試験のテスト問題を工夫すること。

まず、「ごまかし」が通用しないような試験問題を定期検査の出題で工夫する必要があるだろう。教科書完全準拠問題の比率を現在のような九割以上にするのでなく、三割以下ぐらいに減らすだけで、ごまかしが功を奏さなくなる。テストで良い点を取りたいというエネルギーが強過ぎるあまりごまかしを生んでいるわけだから、応用問題の比率を多く出題するようにすれば、そのエネルギーは、応用問題迄できるような学力をつけることに向けられるだろう。

「生徒たちが積極的に学習しないから、問題のレベルを下げて少しでも学習できるようにしている」という低きに迎合する対応は、生徒にますます安易な対応を許容するから、悪循環の原因にしかならない。このことが理解できない場合には、次のたとえが分かりやすいかもしれない。

例えば、ある会合の主催者が、予定時刻になっても参加者の集まりが悪いので、親切のつもりで全員が揃う迄開始を遅らせたとする。すると、遅れても主催者は待つてくれるという安心感が皆に植えつけられるから、次の会合では遅刻者が増える。その結果、定時に来ていた人は、無理をしたのが馬鹿馬鹿しくなるから、更に次の会合ではもっと遅刻者が増える。だから、主催者は会合の開始時刻を遅らせてはいけない、というのは、広く知られた経験則である。低きに迎合する姿勢が悪循環を生むパターンは、

テストにも当てはまるのである。

更に、可能ならば、新学力観で強調されているような、思考力判断力を試す問題や、関心や意欲が反映されるような問題をもっと出題するのも良いかもしれない。思考力を評価する問題を工夫することは難しいことではあるが、不可能ではないことを、日本ジュニア数学コンクールが示している。このような出題は、教師にとってかなり大変かもしれないが、教室に子供達の活気を取り戻せることは確実である。更にそのためには、教師がマニュアル的発想に立たないことがまず必要であろう。本来の教育的視点に立てば、子供の柔軟な発想力は、授業中いくらでも教師に見える筈だからである。

(2) 生徒の学習に対するマニュアル的発想を、ぶち壊すこと。

間に合わせでなく、心ゆくまで何かをやって仕上げるということを教えるのも、大切な教育である。誰かに評価されようがされまいがそんなこととは無関係に、自分で満足がいく迄何かをじっくりとやりとげる経験をさせることで、プライドの教育ができる。これは自我を育てるために必要なことである。

本当に大切な事柄は、決して点検ができない。例えば、実力がつくように問題集で練習することを考えるとしよう。

①問題を解く②答え合わせをする③残念に思う④誤りの原

因を考える⑤同じような問題ができるようになるための対策を考える⑥その対策を実行する⑦自分の学習姿勢を反省する⑧後の学習にそれを生かす、という段階を経れば、問題集を使った効果があるだろう。しかしこの中で点検が可能なのは、①と②だけである。③以降のことは、学習者の心の内部で行われることなので点検はできないのである。だからといって、①と②だけで③以降のことを一切やらなければ単なる演算処理でさえできるようにはならないのである。ここに、「ごまかし」派の親の矛盾がある。もし子供が本当に「ごまかし」に徹しようと点検可能なことのみをすれば、親が目指していたテストのみ高得点という「ごまかし」さえも失敗することになる。

例えばこのような事例を生徒達に突きつけていたり、通知表の評定も評価のほんの一面面でしかないことを生徒達に告げていって初めて、「縁の下力持ち」的な行動が評価できる人間を、育てていけるのではないか。内申書の成績を悪く書くと言って脅すことを利用して、やっと生徒を掌握するような実力不足の教師には、実行できないかもしれないが、目に見えない部分（つまり点検不可能な部分）を授業中などに積極的に高く評価していくことで、マニュアル的発想はぶち壊せるのだ。

マニュアル的発想が常に悪いわけではない。むしろその方が作業が確実にできたり組織がうまく機能する面が沢山

ある。しかしながら、こと学習に関してはマニュアル的発想は壊さないとけない。

(3) 企業が入社試験で学生時代の学習法を確認すること。

新入社員の指示待ち傾向が指摘され糾弾されて久しいが、減るところが増えているのが現状である。学習のように、作業として処理してはいけないものまで点検合格志向で処理する子供が増えている以上、指示待ち傾向は今後ますます強まるに違いない。これは、企業にとってマイナスが大きいのは明らかである。「指示待ち傾向は、ごまかし勉強によって醸成されている」というのは筆者の仮説であり、学術的には更に検証が必要であるが、可能性は否定できないであろう。もしこの図式が成立するならば、企業が人材を選別する際の考查項目に、本人の学習法履歴を含めるとよいのではないか。そしてこのことが一般化すれば、親も自分の子供に「ごまかし」を強制したりはしなくなるに違いない。

(4) 大学の教員養成の過程で「ごまかし」を認識させること。

教員養成の過程で、学生に何を修得させるかと言うことは難問である。多くの指導技術は、現場経験の蓄積によって修得ができるから、そう何もかも大学生の間に学習しなければならぬと言えない。しかしながら、「点検箇所のみごまかすのが学習である」という信念だけは、残

したまま現場に出したくない。従って、教職課程を設置する大学においては「教育心理学」を初めとする複数の科目で、学生に「ごまかし」を認識させる必要がある。

それと同時に、教職課程ばかりでなく他の科目を担当する大学の教員も、テキスト完全引用の問題や出題内容の予告は控えるようにすべきであろう。

## 8 おわりに

本稿では、中学生や高校生の学習に、最近「ごまかし」の勉強が多くなってきたという現象を紹介し、その現象を促進していると考えられる要因を六点指摘した。更に、ごまかしをマニュアル的発想の行動の一つとして位置付け、抑制するための対策を四点提案した。四つの抑制案は、個人レベルで実施可能なもの、社会として実施する必要のあるもの、更に今後の発生の拡大を抑えるものとしてみることに可能である。

筆者は、マニュアル的発想は常に良くないと、主張しているわけではない。企業の中で、古い世代の社員の中にはマニュアル的な発想ができないために、不合理な行動があったり、作業能率や確実性が落ちたり、経験の蓄積が伝達できなかつたりして、企業発展の足を引っ張っていた面もある筈である。むしろそういう人達が多かつたことの反動として、現在マニュアル型発想の人が多くなっているのかも

しれない。しかし、どちらにせよ極端な発想は社会にとっても本人にとってもマイナスであり、本当は、場合にに応じて色々な発想ができるような柔軟な姿勢が必要であろう。子供時代の教育は、人格の陶冶という側面があると同時に、社会で必要な人材の育成という側面を持っている。そういう意味でも、この「ごまかし」傾向には、歯止めをかけなければならぬ。

(ふじさわ しんすけ・教育心理学)

表一 正統派の学習法とごまかし勉強法の比較

英語	正統派の学習法	ごまかし勉強法
<p>英語</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正しい発音を修得し、聞き取り能力も養成する。</li> <li>・英語を英語のまま訳さずに意味を理解する練習をする。易しい英語の本を探して読む。映画を英語で楽しむ。</li> <li>・文法を道具として使いこなすことによって、和文英訳の能力を身につける。これを英文表現力に発展させる。</li> <li>・辞書を充分に活用し、自己学習力をつける。</li> <li>・基本句型を暗記し、語彙を増やす。</li> <li>・英語圏の文化に興味を持つ。比較から日本文化を知る。</li> <li>・旅行、文通、インターネット等で積極的に英語を使う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習を教科書に絞る。</li> <li>・学校の出題傾向を徹底分析し、出やすいところしかやらない。</li> <li>・辞書は引かないで、教科書ガイドを利用して納得し、教科書の英文と訳を暗記する。</li> <li>・教科書準拠問題集を二冊（または一冊とコピー）用意し初めから一冊に正解を赤で書き込み、正解を繰り返し暗記する。もう一冊（又はコピー）で暗記確認をする。</li> <li>・発音の修得はせず、発音問題の答を暗記する。</li> </ul>
<p>数学</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計算力をつける。</li> <li>・解法を多数考え、吟味し、問題を解く毎にそこから教訓を引き出す。解法を体系化してみる。</li> <li>・問題どうしを比較検討し、本質的な意味合いまでも考えられるようにする。各単元の学習意義を考える。</li> <li>・疑問点は、作図や計算をして色々な場合を考えてみる。</li> <li>・目的に応じて資料を収集し、統計をとって傾向を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いくつかの単元がある場合には捨てる単元を作り、得意な単元で確実な得点をねらう。</li> <li>・教科書ガイドや、トレーニング教材の問題のていねいな解法を初めから読んで書き写し、解法のパターンとして覚えてしまおう。パターンが暗記される迄、数をこなす。</li> <li>・解法は一題一方法に限定する。</li> <li>・ノートは暗記しやすいように正解法のみ記入する。</li> </ul>
<p>国語</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読書に親しむ。教科書は必ず音読する。</li> <li>・辞書を引く習慣をつける。</li> <li>・少しづつでも文章（日記等）を書く習慣をつける。</li> <li>・学校の授業は詳しくノートする。</li> <li>・要約文の練習をする。</li> <li>・事実と意見を区別して理解し、表現できるようにする。</li> <li>・漢字の成り立ちや文構造に興味を持ち、自分で調べる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書ガイドを使って教科書中の問の解答を読み、その根拠を考える。</li> <li>・辞書は引かない。（ワークブックやトレーニング教材を利用する）</li> <li>・教科書準拠問題集に正解答を見ながら書き込む。読解問題はその根拠を考える。正解を暗記する。</li> <li>・学校のテストを分析し、先生の好みの答案を考える。</li> </ul>



理科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然現象に興味を持つ。科学読み物を沢山読む。</li> <li>・実験・観察で、仮説検証型の考え方を身につける。</li> <li>・教科書は要点を自力でまとめ体系をつかむ。</li> <li>・公式は成立過程をしっかりと理解する。</li> <li>・暗記材料を自分で作り、必要項目を暗記する。</li> <li>・計算問題集も併用して、法則の修得度を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書準拠問題集を二冊用意し、そのうち一冊に教科書ガイドを見ながら正解を見つけ出して記入し、これを暗記する。もう一冊で暗記を確認する。</li> <li>・物理計算は、解答を理解しながら読んで解法を覚える。</li> <li>・苦手な場合は、理解事項を捨て、暗記事項で点を取るようになる。</li> </ul>
社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史・地理・政治経済の入門書や、興味深い本を沢山読む。テレビ番組もそういうものをよく見る。</li> <li>・新聞をよく読み疑問点は大人と話し合う。</li> <li>・教科書は要点を自力でまとめ体系をつかむ。</li> <li>・暗記材料を自作し暗記する。資料を読む練習をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書の重要語句にマーカーで印をつけ、遮蔽板で隠しながら用語を暗記する。</li> <li>・疑問はできるだけ持たないようにして、ただ暗記する。</li> <li>・記述式問題の対策を、教科書準拠問題集の解答を覚えることによって立てる。</li> </ul>
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・科目が目指している学力がつくので、人生に役立つ。</li> <li>・学習法が習得できるので、初めての分野も独学できる。</li> <li>・興味をもてた分野は、基礎知識の記憶が楽で持続する。</li> <li>・学習意欲がますます高まる。</li> <li>・修得に時間がかかる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・狭い範囲の学校のテストで簡単に高得点が取れる。</li> <li>・科目が目指している「考える力」が一切つかない。</li> <li>・試験が終わると学習内容を忘れてしまう。</li> <li>・学習の目的が、テストで点をとる手段に変化する。</li> <li>・その結果長期的に学習意欲が減退する。</li> </ul>